
ムーンナイト・キャロル

あまつばめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ムーンナイト・キャロル

【Nコード】

N6080S

【作者名】

あまつばめ

【あらすじ】

空に浮かぶ月は、寿命の残高を示す。しかし眺め続けると、怪力を発現して発狂する。そんな残酷な世界で、月を眺める人間を取り締まる『監視者』として働くネイト。彼はある冬の寒い夜に、街外れの廃駅で、月を眺める違反者の少女エステイに出会う。車椅子に座った彼女は言う。「発狂したら力がいっぱい出るんですよね？わたし、走ってみたいんです」。少年少女が出会うことから始まる、月夜のファンタジー。

「誰だ、月に夢中のバカ者はあ!？」

その暴力的な台詞を耳にした瞬間、冗談ではなく心臓が止まったかと思った。すでに夜の帳が降りきった街路を歩いている人間は僕くらいしかない——その安心から、周囲の警戒を怠っていた。

すぐさま視線を空から外して、大声のした方向を確かめる。果たしてそこに通行人はいなかった。後ろ、左右、全てを確認するが誰も僕を見てはいない。

どつどつ、と速くなっていた鼓動を無理やりに落ちつける。冷静になれ。思い返せば、先ほどの怒鳴り声は少しくぐもっていた気がする。

そう、窓越しから声をかけるような感じ。

とすると、声の出どころは、目と鼻の先にある民家が。

「——ばかやろう、滅多なことを言うな……!」

同じくぐもった声が聞こえ、次に勢いよく窓が開いた。少しだけ鼻先が赤くなった男が左を見て、そして右を見て、立ち止まった僕の姿を捉えた。

僕の着ているコートの色、胸元の刺繍などを確かめた途端、

「す、すみません。酔っ払ったアホが喋っただけでして、滅多なこととは何もしてないので……」

平謝りしてきた。相手の余裕のない様子を見て、ようやく僕は足を路面から剥がすことができた。男に近づくにつれて、酒の匂いが強くなる。

なるほど、酒の席での暴言、か。

「……いえ。何もないのなら良かった。けれど夜間ですので、声は少し控えめに」

「は、はい。その、さっきの奴にはしっかり言っておきます」

「まあ酔っ払ってる人なので、多少のことには目をつぶりますよ。」

実行犯でもないんですし。えっと、それではこれで」

僕が早目にお咎めなしの判を押したことに、男ははつきりと安堵の色を見せた。けれど本当に安心したのは僕の方だ。男たちの家がずっと後方になった時になって、ようやく、ため息を吐きだせた。

まだ冬には遠いけれど、最近の夜は少し冷え込む。今年になって初めて意識した白い吐息は、空気にほどけながら上昇していく。それを追って、自然と視線も上へ。さっき手痛い目に合ったばかりだと言つのに、自分の自制力の低さには呆れてしまう。

だが、空に浮かぶアレが、不思議な引力を持っているのは明らかだ。もし、この場に第三者がいれば、僕はこのコートを着ていたとしても嚴重注意の対象となることだろう。

何人たりとも、夜間に首をもたげてはいけない。

それを目に留めることが、そもそも許されないのだ。

――月。

コートと同じ濃紺色の天空に、不気味なまでに煌々と居座る姿は、静かであるのに仰々しい。あんなけばばしい光を放つモノに毎晩見下ろされることが気に障る。たまには休めと言いたい。残念なことに、空に佇むアイツは、僕が生まれるずっと前から、毎晩欠かさず顔を出している。完全な闇に包まれる夜などこの世には存在しなかった。

「一昨日より……少し、減ってる？ いや、そんなことはないか……一日や二日じゃ、な」

初めに気付いたのが誰なのかは、興味がないから知らない。適当に偉い科学者あたりだと思っている。とにかく僕よりも学があり、才能と知識に恵まれた人が打ち出した説だったのは間違いない。

曰く、空にのぼる月は、命の残高である。

その提唱を証明するため、あるとき実験が行われたそうだ。

五歳以下の子供と、六十歳を越えた老人たち。それぞれを数十人集め、同じ晩、同じ月をスケッチさせたのだ。細部まで書き込む必要はない。ただどんな形の月がのぼっているかを、調べた。

結果は予想していたとおり。子供たちのほとんどが満月に近いイラストを並べ、老人たちは今にも消えてしまいそうな、三日月をげつそりと細らせたものを描いていた。子供の中で一人だけ、半月を描いた者もいたそうだが……その子は、持病により十歳で亡くなった。

空にのぼる月は、見る人によって形が違う。

この地上で生活する僕たちは、夜ごとに寿命の残高を突きつけられる。無言のプレッシャーと、背筋が震えるまでの輝きとともに。

毎晩だ。

毎晩、頭の上に浮かんで、お前の命はもう半分減った、三分の一になったぞ、と聞きたくもない情報をばらまいてくるなんてお節介もいいところ。見なければいい、というのは理想論だ。残りの寿命を知りたくない人間など、いないのだから。

そして気分の悪い情報をばらまくだけで飽き足らないのだから、月というものは恐ろしい。

月の本性は、それだけではすまなかった。

「……ま、そのおかげで食いはぐれないですんでるんだけどさ」

視線を落とし、街灯の半数以上が消えた路地を歩き続ける。

通行人はいない。街は死んでいる。夜はいつだって同じ風景。まるで公演中の演劇のように、同じ夜ばかりが繰り返している。

どこの家もカーテンが引かれ、少し歪んでいる看板もそのまま、縁石のあたりに転がっている特徴的な形をした石も昨日と同じ位置で、また僕の歩いている場所もスピードも時間も寸分の狂いもないのではないだろうか。

焼き回しの毎日。このまま時が経ち月の姿がさらに小さくなって、僕は同じようにこの路地を歩いている気がする。酒と煙草を覚えたら息切れするのが早くなるだろう。病にだって罹るかもしれない。けれどそんなものは些細なズレだ。

これからも続く。同じことが。肅々と、茫漠と。ただそれだけは理解できた。

どうせこの角の先も、昨夜と同じに違いない。

「はは、やつぱり」

昨夜の再演を自覚させる存在は、今日も変わらず立っていた。僕より少し歳下に見える少女だ。見ているこっちが凍えそうなボロ服をまとって、色彩の乏しい小花の入った籠を提げている。相変わらずのいでたち。目が合った瞬間、これまた相変わらず、少女はバツが悪そうに視線をそらす。やれやれ、何度目のやり取りになるのだろう。

しかし今日は、昨日と少しだけ違っていた。

「こつ。こんばんは」

少女のほうから声をかけてきたのだ。

「うん、こんばんは」

「し、静かな夜ね」

「そうだね。いきなりで悪いけどさ、きみって馬鹿なの？」

「えッ……え？」

「この間から、ずっと同じことを言ってる気がするんだけど」

「う。夜がふけてきたら、はやく帰れ……」

「そうだよ。月は人を狂わせる……新聞を読まなくても知ってるよね。きみ、狼男にでもなりたいのかい」

「そんなわけ、ないよつ。今日だって家を出てから一度も、空、見てないから！」

月を眺め続けると、人間は発狂する。

比喩的なものでは断じてない。

本当に頭がおかしくなるのだ。まず理性と呼べるものがほとんどなくなる。そして怪力の発現だ。その人の体躯ではありえないほどの力を発揮して、湧きあがる殺人衝動でもって周りの人間を殺そうとする。獣のように。

創作の世界で使われた単語から、その状態は『狼男』と名づけられた。狼男を生むことを未然に防ぐこと。それが監視者である僕の務めだ。

つい最近も近隣の街で被害が出たばかり。五歳の男の子が分厚い櫛の扉を素手で破壊し、同い年の女の子を文字通り引き裂いた。その地域を担当していた同業者は怠慢を続けていた事実が分かり、解雇されたと聞く。そんなことがあったばかりなのだから、同業者が神経を尖らせるのは当然だった。

「空を見るとか見ないとか、そういう問題じゃないだろ」

「……言いたいこと、分かるよ。けど……」

「なに？」

今日の少女は、ずいぶんと雄弁だ。いつもは素直に言うことを聞いてすぐ帰っていくのだけれど。

すー、はー。少女は深呼吸を繰り返したあと、再び口を開いた。

「花、たくさん売らないと……うち、貧乏だから」

夜道をうつつくことは、急患の場合などをおいて許可されていない。しかし少女のように生活がかかっていると、やはり監視者の目を盗む者は現れる。民家の窓を叩く普通の物売りから、夜鷹に禁止薬物——挙げていけばキリがない。

しかしそれを許してしまえば、それだけ狼男になる人は増えるのだ。

「悪いけどこっちも仕事だからさ。そもそもこんな夜中に、花をかうやつなんているの？」

そこが疑問だった。僕の巡回するルートは毎日決まっているとは言え、ここでうまく取りいって客を増やしたところで、売り上げの足しになどなるのだろうか。食べ物や生活必需品でもなく花だ。見込みは薄い、薄すぎる。

「あ、はは。そうだね。売れた試しはないかな……」

「じゃあ尚更、帰りな。こんなとこに毎日立ってたら、他のことを邪推しちゃうからさ」

「え？」

「売り物は花じゃなくて、実はきみ自身、みたいな」

「な……！ わ、わたし、そんなこと一度もしてないよつ。ホント

だから！」

「へえ」

「信じて！ 嘘じゃないよっ！」

「わ、わかった信じるよ」

急にどうしたのだろう。なぜこの子は、自分の貞操をこんなにも強く訴えてくる？

「えっと。あの。その。あなた、いつも暗そうに歩いてるから……」

「悪かったね。この顔はもともと」

「ああ、じゃなくて。元気、そう、元気がなさそうだから、その……お花、どうかと思うって」

少女の頬にわずかだが朱色がさす。なにかを期待するように瞳がうるみ、わずかに小首を傾げた彼女を純粹に可愛いと思ってしまう。いつもこの角に立ち、僕に注意されることを待っているように見えた、その理由が分かった気がした。

——この子は、もしかして、僕を好いている、のか？

カチャンと何かがかみ合う音がした。職務を冷静に実行しようとする責任感とでも言えはいいのだろうか。この聞き分けのない子を追放しようと思った。

僕は少女の身体を、出来る限り不躰に眺めてやった。擦り切れた袖。洗っていない髪。歳の割に膨らんでいる胸元。

少女の眉が怪訝そうになったところで切りだした。

「……きみてさあ、よくよく見ると汚いよね」

「っ！？ あ、う。く、臭い、かな……？」

彼女からはいつも花の香りがしていた。正直、落ちつく香りをした子だ。たしかに饅えた臭いも多少はする。けれど貧民街生まれの僕には慣れた臭いだ。さらに言えば、この子は少しでも清潔に努めようとしている様子がありありと見える。たとえば、花を売る指先だけは爪先までしっかりと洗っているところとか。

そんな彼女にこの言葉は堪えるだろう。

「ああ、臭いね。そんなきみと毎日顔を合わす僕の身にもなって欲

しいな」

少女との間に沈黙が降りる。しばらくして僕は「あっ」と声をあげた。できる限り自然に。

「もしかして、逮捕されたいのかな。たしかに牢屋は風も当たらないし、最低限だけでも食事もある。道ばたで花を売るより楽かもしれない。けれど月関係で捕まった人は、まず差別されるよ。あまりオススメしないかな」

ずっと低いところにある頭を叩くように、言葉をぶつける。

「わたし……ただ、あなたに、」

「あのさあ……ったく。僕がほかの監視員より甘いと思って、舐めてるだろ」

少女が鼻白み、一步下がった。

「夜が更けたら帰れ、と言っているんだ。いい加減にしてくれないと、きみの家族に連絡するぞ。監視員の言葉をおたくの娘さんが聞きますんってさ。目立つ時間帯に行こうかな。ご近所に噂が回るの、はやいだろうね」

「う、う」

「そもそも、花なんか欲しくもないんだよ。とつとと消える」

吐き捨て、目的地への移動をかねての見回りを再開する。あれだけ厳しく言い含めれば、明日からあそこに立つこともなくなるだろう。これであの子が死ぬ可能性を減らせた。もちろん僕がこの仕事を続けられる時間も増した。

もつとほかの言い方があったのかもしれない。彼女の好意を丁寧に受け取り、日の落ちない合間に会って友好を育むことも可能だったろう。

けれど僕はそれを拒み、職に殉じる方を選んだ。

今日はたぶん、変わり映えのしない日常を変える機会、だったのだろう。

たしかに僕は、毎日同じことを繰り返す日常に辟易している。けれど、かといって何かを手に入れること、状況の変化というものに

対して憧れを持っているわけではないのだ。両の手でもがき苦しみながら掴み取る、その行為を僕は馬鹿らしいとすら思う。

どうせ何かを手に入れたところで、空を向いて月を眺めてみれば、そんな幸せは吹っ飛ぶ。

限りある、そして終わる時期すらもご丁寧に教えてくれるモノがあったら、何かを手に入れることも、持ち続けることも、失うことも、傷つけることも、どうでもよくなる。

少なくとも僕はそうだ。

少女の泣きそうになった表情だって、どうせ三日も経てば忘れる。忘れるのだ。心の澱にすらなりはしない。

「……ああ」

けれどいまこの瞬間は、頭にこびりついて離れない。それぐらいには、彼女を傷つけたことを気にしている自分がいた。極端になれないのは、僕が弱いからか。

路上へつばを吐くように、空を見下ろせたらいいのに。

「……お前の、せいだ」

能天気な空で光っている月に向かって、僕は責任をなすりつける。たまにこんなことをしなければ、気が済まない。

ため息を深く吐きだし、目的地である廃駅へと、僕は足を速めた。

* *

街外れの廃駅に、浮浪者が住み着いているとの通報があった。

人の目を盗んで月を眺める不届き者だったら、万が一があるため、確認に行つてほしい。

街の監視者一人で十分だろう。誰か行つてくれ。

有志、またはクジで決めるのかと思つていた僕は甘かった。

「街外れの駅つて、あのスツゲエ遠いところだろ？ 寝る時間なくなる」

「面倒だ。年寄りは無条件で却下な」

「若いやつが行け。そうだナイトお前だ。一番ガキだろ。よろしく」
話しあいなどというものは、年長者のワガママの前には鼻紙も同然だ。無視して上層部から罰則を受けても堪らないので、こんな夜中に件の廃駅を目指している。

まったくの無駄骨であつたり、イタズラの通報だつたらやりきれない。時間外手当があるとはいえ、面倒なことには変わりない。

ため息を飽きるほどついてようやく、廃駅のシルエットが見え始めていた。

廃線処分になったのも納得できる、小さな駅舎だつた。線路を引いたは良いものの、施工主の都合で計画が頓挫したと聞いた。敷きレンガの路面などとうになく、草や石ころばかりが転がっている土の上にぼつんと駅舎だけがある光景は、なぜか途方もない寂寥感を与えてくる。あと十年もすれば、腐つて土に還つてしまうのではないか——そんなありえない想像がなぜか現実味を帯びるのだから不思議だつた。

過去には『祝福の広場』とも呼ばれていたらしいが、今となつてはどこにもその面影は見えない。もしかしたらこの駅舎にも、月の寿命告知は見えているのかもしれないかつた。

「……くだらない」

馬鹿らしい想像は捨ててしまふにかぎる。建て付けの悪くなつた硝子張りのドアを、震わせながら開け放つた。

駅舎の中は閑散としていた。

待ち合いのベンチが二つに、ホームへと抜ける改札代わりのガラス戸が正面にあるだけ。あとは改札口の傍にある窓口——車掌室へとつながる扉があるだけ。僕の住むアパートを少し広げたくらいだろうか。採算が取れないことをそもそも見越して作っているように思えた。こんなものを建てる金があるのだつたら貧乏人にパンの一つでも恵んだらいいのに。

「だれかいますかー？」

冗談まじりに大声をあげてみる。無駄なものが何一つなく、空気

すらも落ちついてたせいによく響いた。予想どおり誰の返事もない。

自分の靴音、吐く息ばかりが耳に障る。月が照っているから灯りの必要はないとはいえ、こんなもの悲しいところに人がいるだなんて、想像するのも嫌だ。寒くて、暗くて、寂しいところは不安になる。それが人間としての本能だろうから。

車掌室の中もきちんと調べた。どこにも人が隠れるようなスペースはない。

ここには誰もいない。それで間違いなさそうだ。仮に、ここに居たかも知れない奴は、どうせ今頃は別のところで浮浪者やつてる。問題なしと通知して、それなりの疲労と引き替えに給金をもらおう。浮いたお金で何を食べようか、とそこまで考えたところで、あることに気がついた。

「……あれ。なんだろ。開いてる？」

ホームと駅舎内をつなぐガラスをはめ込まれた戸。それがわずかに引かれており、小指の爪ほどの隙間が生まれていた。いま誰かが開けた、わけでもないだろう。もしそうだったら怖すぎる。初めから開いていたのを、僕が見落としていたらしい。

とりあえず外も確認しておくか。

横開きの戸を開くと同時、これでもかとかばかりに冷やされた空気が駅舎へと入ってくる。コートの襟元を強く閉じ、ホームへと進み出た。

ほんの十数分前よりもぐっと冷え込んでいる。このままジツとしていたら風邪でも引いてしまいそうだ。

何気なく首を動かした右手側。

椅子に座った女の子がいた。

ふうん、女の子いるんだ。そう思って左手側を確かめようとした首が、ギチリと固まる。

……なんで。

人が、いる。

見間違いではなかった。女の子は椅子に座って、視線を上へと向けていた。

風景のようだった。駅舎の光景にあまりに溶け込みすぎて、初めは視界に入れたというのに異常に思わなかったほど。木造の古い駅舎にたたずみ、月明かりを浴びながら頬笑みを浮かべる彼女は、神秘的なまでに美しい。ここを調べに訪れた僕の方が場違いなのでは、そう思わせるほどに画になっている。

月をこし取ったかのような銀色の長髪。雪のように、少し病的なまでに白い肌。健康的な色に見えないぶん、余計に人間離れして見える。まるで人形のような綺麗さが彼女にはあった。

この駅舎にいるというだけでも十分な驚きなのに、僕は彼女の姿勢を「異常だ」と感じ取ることになりの遅れを取っていた。それだけ彼女のその姿勢が自然だったということもあるが、それにしただけこの光景は恐ろしい。

「あ、のさ……」

僕の声はきつと聞こえているはず。それなのに、椅子に座った彼女は微動だにしない。

ただ、ひたすらに、月を見続けている。
月を、見ている。

「きッ。きみ、なにやってるんだ？ 見るんじゃない……やめろ！」
ようやく彼女の耳へと声が届いたのか。

銀髪の少女は両手を使い、座っていた椅子についた車輪——この時になってようやく彼女が車椅子に乗っていると気がついた。どれだけ注意力が散漫しているのだろう——を回転させ、僕のほうへと向き直る。

黒を基調にしたシンプルなスカートドレスを纏い、折れそうな肩には気休め程度のストール。瞳は優しい血の色。なんだかおかしい言い方だが、血のように赤い彼女の瞳は、どこか優しげに感じられたのだ。

「くんばんは」

儂げに彼女は笑い、首をかしげる。

「——良い月夜ですね」

人形的な美しさを増した表情を、僕へと投げかけたのだった。

* * *

翌日の昼。僕は上司に金一封を受け取っていた。眠い身体をここまで引きずれたのも、ひとえにこの中に入っている紙幣のおかげと言えよう。

「異常なしか。まあそりやそうだろうな。あんな街外れ、物好きの変態でもない限り住むわけがない。残飯もねえのに住み着いてどうすんだって話だぜ」

実際には物好きの変態がいたわけだが、そう言つと彼女が怒りそうだ。

「なににせよご苦労だった。昨日はあまり寝てないんだろ？ 今夜までにしっかり休んでおけよ」

「言われずともそのつもりです。ついでに、今夜は出勤しなくていいよ、みたいな思いやりありませんか」

「寝ぼけるな小僧。いいから月への耐性がある間に稼いどきな。歳取ってから楽ができる」

「僕、まだ十六ですよ。平気ですって」

「俺の知り合いで、十四歳で耐性亡くした女がいるぞ。歳は関係ねえ」

監視者になるには、月を見ても発狂することのない特殊な体質——耐性がなければならぬ。

確かめる方法は、志願者を柱にしばりつけ、一週間月とにらめっこさせる。それだけだ。狂わなかったら合格。望外な給料と共に名誉職である監視者の地位を手に入れる。発狂したらその場で銃殺だ。貧窮層の口減らし、借金で進退極まった者、学も一芸もない孤児が主に立候補する。

このようにして決まる監視者だが、月への耐性は無限の産物ではない。個々人によって違うがいずれはなくなるもの、という調べが出ている。耐性の切れる兆候は一切なく、ある日突然やつてくるらしい。歳を取ると切れやすい、女より男の方が切れやすい、などの眉唾な話があるがはつきりしたことは分かっていない。

「まあ休みたい気持ちは分かるぜ、ネイト」

今の僕の休みたい理由は、仕事の疲労だけではないのだが、曖昧に頷いておく。

「本当は俺だって休める予定だったんだぜ。ノエル家の令嬢が亡くなったの、お前も聞いただろ。監視者代表で、葬式に呼ばれると思っただけなんだがなあ」

ノエル。この街では知らぬ者のない富豪の家だ。一昨日くらいの新聞で見た気がする。最愛の娘クリスティーナが病気で亡くなったという記事だった。悲しみにくれた父親は、娘の遺言に従い密葬にしたと書いてあった。

「この街を国に見立てたら、ノエル家は王様だぜ。娘の言葉どおり密葬っておいおい、こういうことだ。せつかくうまいものが食えると思っただけだよ」

「それが本音ですか」

「当たり前だ。顔も知らん女の葬式なんぞで食欲が削がれるか」

人が死んでいるというのにこの言い方。思わず笑いがこぼれ出る。前々から思っていたことだが、監視者にはこの手の下衆、ひねくれ者が多い気がする。僕を含めて。

「ったくよお。ノエルの旦那、いい暮らししてるんだから飯くらいケチケチしなくてもいいのによ。風の噂じゃ、若い愛人もいるらしいじゃねえか」

「金持ちは総じてそんなものでしょう」

「俺だって金は持つてる」

「たしかに監視者は高給ですけど、僕らは嫌われ者ですからね」
狼男と接触機会が多いのだ。当然傍にいたら危険も多い。まあ遺

産目当てで寄ってくる豪胆な女性もいるらしいが。

「ええと……それじゃ僕は、休ませてもらいます」

「おう」

一礼して素直に退室する。

上司の目の届かないところになった矢先、封筒の口を破って金額を確かめる。本人の前で確認する失礼は犯せないが、遅れて確認したのちに不平を伝えても聞き入れてはくれない。あの人は平気で金をちよろまかす。

街外れまで歩く面倒と徹夜の代償としては、妥当な数字ではあった。数字だけ見れば少し半端だったから、たぶんいくらかは抜かれているだろうけれど。まだ許容範囲内だ。なるほどこのくらいなら抜いても文句はないわけだ。僕が偉くなったときの参考にしよう。財布が厚くなるとやはり安心する。ひとまず商店街へ出て必要なものを購入しよう。

日持ちする食料に清涼な真水。あとは毛布。廃駅には古いストーブがあるから液体燃料も。着替えの心配はしなくてもいいだろう。持っているとも言っていたし、僕が世話できる範囲ではない。

悪いことをしているというのに、心も足取りも軽い。その事実に関しては、僕も少し申し訳ないと思う。

僕はいま、監視者として最低のことをしている。

——彼女を通報しない。それどころか、世話を焼こうとしている。なぜと訊かれれば、彼女の生きざまに魅せられた、ということになるのだろう。

昨夜の邂逅は、それほどまでに鮮烈だった。

* *

「——良い月夜ですね」

鈴を転がすように笑う彼女は、月を眺めている現場を監視者に目撃された人とは思えなかった。僕は努めて冷静に、コートの内ポケ

ツトから拳銃を抜き出し、構えた。

「違反者にも二つ種類があつてね。本心では見たくないのに寿命の残高が気になるゆえに泣く泣く見てしまう人と、きみのようにあつけらかんとした罪の意識のなさそうな人だ。後者には即刻の銃殺が許可されている」

「それは、それは。わたし、撃たれちゃいますか」

「……報告書には、月に魅入られて錯乱状態だった、と書いておこなうかな」

「いえいえ。ただ死が怖くないだけです。……隠すことでもありませんね。病気のせいで、わたしの見える月は、糸くずのように細いんです」

身じろぎする彼女の上半身と違い、微動だにしない両足を見る。行動に支障が出るほどの重篤患者、ということか。

「僕は監視者だ。見ればわかると思うけど」

「はい。生まれてほとんどが病棟暮らしだったので、そのコートはほとんど見たことがあります。存じています。黒い髪にとってもお似合いですよ」

「そりやどうも。褒めてくれた後で恐縮なんだけど、きみを逮捕しなくちゃならない」

「……それは見逃していただけませんか。もう先のない命ですから」「そういうわけにもいかないよ。きみが狼男になったら、街の人たちが危険にさらされる。僕もまだ路頭に迷いたくないし。残念だけどさ」

「……わざわざこんな街外れまで離れている事実を見てください。他の人に被害を出したくないから、わたし、こんな身体でここまで頑張ったんですよ？」

少女の言い分は、たしかに最もだった。このあたりならば人つ子一人いない。祝福の広場などと大層な名前がついていても、所詮はただの空き地だ。

「へえ。人に迷惑はかけないけれど、狼男にはなりたいつての？」

「はい。そうです」

「……僕にはよくわからない。きみが何がしたいのか」

「狼男は、ありえない力を発揮する、とお聞きしています」

「そうだね」

「さらに少しではあるけれど、理性が残るとも」

「狼男に変身した知り合いと、わずかだけど会話した監視者もいるらしいね。それが？」

少女は常に微笑を称えている。まるで写真を見ているかのようだ。笑った表情のまま筋肉が攣っているのではないかとすら思う。

「——わたし、走ってみたいんです」

そんな当たり前のことでも、車椅子に座った彼女が言うだけで途方もない重みとなる。

「狼男となった老人が鉄門を破壊したという記事を新聞で読みました。そんな芸当ができるなら、きつと、わたしの動かない足だって

……」

滔々と語ってはいるが、彼女の言葉の端々に熱を感じる。

その熱は、僕の持っていないものだった。何かを手に入れようとすることも、失うことも、やがて訪れる終わりの時が見えていると、途端に色あせる。別に持たなくてもいいものだと思ってしまう。その思いが常に根付いているから、僕は今まで淡々と、炭酸水の泡のように生きてきた。

しかし、この子は、面白い。

「監視者をやってて、そんな興味深いこと言われたの初めてだよ」

「それじゃあ、見逃してくれますか？」

「それとこれとは話が別だよ。きみは重要なことを忘れてる。狼男の殺人衝動をね」

生きるもの——特に人間を優先的に狙う、狼男のもっとも恐れるべき行動だ。

「大丈夫です。毒薬を持っていますから」

彼女はポケットから、針金に通された、小さな小さな合金の球を

取りだす。見覚えがあるどころか、僕が毎日お世話になっている毒薬球だった。

月に対する耐性がいつ切れるかわからない監視者。また月を見上げなければ暴れ出す精神病患者にも使用されるものだ。輪っかになった針金を奥歯にくくりつけて準備は完了する。人の顎力では砕けない合金だが、狼男となった途端にあっさり割れる。それである世逝きという寸法だ。

「走るだけ走って満足したら、口に放り込んであの世逝きという寸法です」

細かいところまで無駄に配慮が行き届いている。

これならば、大丈夫なのではないか？

僕は花売りの少女をてひどく追い払ったことを思い返していた。あのとき感じていた、何かを求める無意味さを覆す気はさらさらない。

しかし。

死期間近と述べる目の前の彼女。車椅子に座った彼女。

その彼女がもつ、走りたいという思いを価値のないものだと思断じすることは、僕には出来なかった。終わりのときが見えているのに、そんな熱意を持てる彼女を。僕は素直に羨ましいと感じたのだ。

「……わかったよ。きみの準備の良さには負けた。……見逃そう」

「わ！ 本当ですか！」

「ああ。だけど一つ聞きたいことがある。あくまで予想なんだけど、きみ、ここにきて何日か経ってるだろう」

「ええ。もう五日……になりますか」

その間、眺めていても発狂できなかった。もしかしたら、この子には耐性が存在している可能性がある。

尋ねると、個人差である耐性のことは彼女も理解していると言った。

「きみの耐性がいつ切れるかわからないことには、僕も安心できないからね。これからもたびたび来るよ。きみが変身しそうになった

ら全力で逃げて、街の入り口を見張る。それでいい?」

「監視者ですものね。わかります」

「あとは、死体の処理も請け負おう」

「……失念していました。たしかに、誰にも見つからずに腐っちゃうとか、嫌ですものね。お願いします」

ふふつと笑う彼女を見て、笑うことかよと軽口を返すことはできなかった。

「僕はネイト。気軽に呼び捨ててくれていいよ。きみは?」

「わたしは……えつと……エ、エステイ」

「苗字は?」

「えつみよ、苗字……その。ええと。きゃ、キャロル」

エステイ「キャロル。変わった名前だ。」

「よろしくエステイ」

前向きに自殺しようとする人を見て、僕は尊敬とともに好奇心を抑えきれなかった。

「はい、ネイトくん。……ふふ、ネイトくん、ネイトくん」

「そんなに覚えづらい?」

「いえ。嬉しいだけです。同年代の知り合いは、初めてなので……」

「これからも、ちよくちよく、来てくれるんですよね?」

「ああ」

「約束、ですよ」

——約束。

そんな言葉を、僕はもしかしたら、生まれて初めて交わしたのかもしれないかった。

* *

夕暮れどきの街外れ。廃駅に向かうまでの土くれた道のりは、何もないというのに墓地のような気配がする。月夜であればそこまで恐ろしくはない。ゆっくりと消えていく斜陽が、照らしてくるから

怖いのだ。まるで道連れにされているような、不思議な錯覚を覚えてしまう。

「分かりますよ」

臨時収入で買いあさった食事は、エステにはおおむね好評だった。僕にとっては食べ慣れたパンであっても、彼女には新鮮な品にうつるのだろう。彼女の荷物には日持ちする固形食糧のみだったため、まともな食事は久しぶりなのではないだろうか。それにしても食べる量がひどく少なく感じたが、彼女の身体は多くを食べるようにはできていないらしかった。

「わたしも、ろうそくが消え終わる瞬間に、一緒に命を持っていかれるんじゃないかと考えることがあります。何かが終わろうとする瞬間——それに引かれる、または追従しようとするのは本能なのかもしれませんね。ところで——」

「うん？」

「わたし、もうすぐ死ぬのですけれど」

「そうらね」

「お食事しながら流されるほど軽い話でしょうか」

「ああ、ごめん。でも変に気を使ったりしないほうがいいかと思つて」

ここに歩いてくるまでの間に、僕なりに必死に考えたことだった。病院暮らしならばその手の同情や心配など慣れっこだろうから、変に話題を避けてぎくしゃくするのはいけない気がした。そもそも僕と彼女の持つ死への恐怖は、決定的に異なる。理解などできようはずもない。

「ネイトくんは冷たい方ですね」

「よく言われる」

「でも優しいとも思います」

「そうかな」

「わたしが明日も知れない命だと知っていても、命の話題を出してくれました。普通に扱われるって、なんだか面白いですね。新鮮で

す」

自嘲気味に呟くエステイは嬉しそうなのか寂しそうなのかよくわからない表情を浮かべたまま、かじりかけのパンに口をつける。

「すみません。わたし面白い話とか知らないのです、お返しができません。本当にいつもいつも、耳にたこができるほどつまらない子だと言われ続けてきたので……」

「……そうかな。エステイは面白いと思うけど。走るために発狂したいなんていう人は初めてだったし。そういう考えもあるのかってそう、なんていうか、新鮮だ」

瓶に入った水をちびりちびりと飲んでいたエステイが、くすくすと笑う。

「いいですね。お互いで影響を与えあっている。わたしたち、なかなか良好な関係じゃありませんか」

「まだお互いのことをよく知っていないから、相手のいいところしか見えていないだけじゃないの」

「そうとも言えますね。たしかに」

そのあと、話はエステイの耐性の問題へと発展した。

結局エステイは、昨夜も空が白むまで月を見続けていたが、発狂することはなかった。今夜も狂わなかったら六日目となる。ここまですることはなかった。平気だと耐性があることは濃厚だ。監視者を選定する試験でも、初めの三日がもっとも銃殺者が多い。五日を越えて平気ならば、九割以上の人間が合格するのだから。

「わたし、取り柄なんて全然ないのに……こんな無駄なところで発揮するなんて」

「まあ……ね。普通は喜ばしいし、金になる体質なんだけど。エステイの場合は余計かな」

「ともかくこれからの目的は、わたしの耐性を取り除くこと、でしょつか？」

「それが証明できたらみんな大騒ぎするだろうさ。研究者たちが常に調べ続けているけれど、法則性はまったく発見できてないんだよ」

「そう、ですね。けれどわたしの寿命はたぶん……もって、一ヶ月ないでしょうし」

驚いた。そんなに短いのか。

「数年前に見たときの大きさと、ここ最近の月の大きさ……それらから計算してだいたいそのくらいです」

あと一ヶ月かそこでエステイの耐性を失わせなければ、この子は走るといふ夢をかなえることなく寿命で死ぬ。

それはあんまりのように思えた。

「わかった。僕も色々調べてみるよ。監視者の仕事場にはそういう資料も集まってくるし」

「お願いします」

もうすぐ死んでしまう。しかし彼女は慌てたり、悲観に暮れたりしない。僕の前だから表に出さないようにしているのか、それともすでに怯える段階というものを飛び越えてしまっているのか。

死を間近にした老人のような、達観した雰囲気があった。

「いま考えたんですが……こんな足じゃなかったら、わたしだって監視者になれていたのかも、しれないんですよ？」

出会ったときからそうだ。彼女は自分の足の話をぽろりと出す。本人がまるで意識していないことなのでどうしようもないが、聞く側としては少しばかり居心地が悪い。

「そう、だね」

「ネイトくんとおそろいのコートが着れたんだと思うと、少し残念です」

「だったら着てみる？　少しなら構わないよ」

「わ。いいんですか」

刺繍入りの紺色のコートを脱ぎ、エステイへと手渡す。彼女の指先は細く脆そうで、重たい繊維を使っているコートを支えることも辛そうだった。防寒が優秀なだけでなく、防刃加工に衝撃緩衝材も入っているためにかなりの重量なのだ。

「うあっ。なんですかこの重さ。これをまもって、普段から身体を

鍛えてるわけですか？」

「いや。あくまで身を守るためだよ。それ着てれば、狼男に殴られたら胴体が千切れる代わりに、アバラが数本折られるだけですむつていう優れものなんだ」

まあ顔でも狙われたら即死は免れないけれど。さらにこれを着ている者は、有事の際には積極的に狼男に立ち向かわねばならないのだ。たまったものじゃない。

車椅子の背もたれのせいでうまく着ることのできない彼女を手伝う。絹のようにサラサラとした銀髪が、コートの上にこぼれ落ちる。男ものだからサイズはあつていないが、なかなか様になっていた。

「うう、肩が痛いですっ」

「僕も始めはそんなだったよ。そうそう、ここだけの話。実はそのコートを着てると、商店でも値引きが利くんだよ」

監視者は栄誉職だ。もちろん月への耐性があることを気持ち悪いと言う者もいるが、大抵は街を守ってくれてありがとう、という気持ちとともに、値段に手心を加えてくれる。

「至れり尽くせり、ですね」

満足したエスティからコートを返してもらい、袖を通す。

食事もあらかた終わったためか、次第に眠気が襲ってきた。大あくびしたところを彼女に見とがめられる。

「わたしは朝からお昼にかけて寝ましたけれど、そういえば、ネイトくんは……」

「報告やら、何やらで結局寝てないんだ。あふ……」

僕が夜間警備をする時間帯までは、まだある程度の時間がある。ここから街中まで行く時間を差し引いて、猶予はだいたい三時間とあったところだ。

「少し眠ったらどうですか？ 起こしてさしあげますよ」

「——いや、それは」

人前で眠るという愚は、骨身に沁みていた。貧民街で学んだことだ。起きたとき、着るものも金もなくなっていたことがあった。親

に捨てられた僕を親切に世話してくれたお爺さんを信頼したばかりにそんな目にあつたのだ。人は醜い本性を軽々と笑顔で包みこむことができる。と知っている。

それを十分理解した上で。

「お願いしよう、かな。三時間ほどしたら起こしてほしい」

「はい」

エステイは違ふと思った。彼女の外見の可憐さ、清楚さに惚れて前後不覚になつたわけではない。彼女には人からものを盗むという卑しい考えそのものが浮かばないように思えた。人間として綺麗と評すればいいのか。いっぺんの淀みもないそよ風のような清々しさがこの子にはあつた。

「三時間したら、起こしますね。約束します」

彼女はまた、約束という言葉を使つてくれた。

なぜだろう。

寝付きの悪い僕が、一度も寝返りをうつことなく、深い眠りへと落ちていった。

* *

それから十日が過ぎ、二週間を越えても、僕が廃駅へと通う日々は続いていた。日が変わる頃から明け方まで、多少の会話をしつつも、エステイは食い入るように月を眺める。けれどそれだけだ。何も変化はない。

どうして余命いくばくもない彼女に、月に対する耐性などが存在するのだろうか。皮肉で残酷な現実を僕は呪つた。月の寿命告知は刻々と近づいている。

動けない彼女に代わつて文献を読み漁り、研究者のまとめた論文にも手を出してみた。知り合いの監視者にも尋ねて回った。けれど、進展は何もなかった。むしろみんな、一樣にして僕の焦りに戸惑い、そしてその後に出來の悪い子供にものを教えるように、理由なんて

ないのだと説くだけだった。

「焦りますねえ」

台詞とまったく相いれない呑気さで、エステイは果物をぱくついている。彼女が物を食べる姿を見るのは久しぶりだなと、思った。

エステイはこの二週間で随分と痩せた。普段からたくさん薬を飲んでいりし、ずっと入院していたと言っていたから体力がそもそもないのだろう。

鳥の餌ほどこしか食べることができない彼女だが、それでも口調や表情から活気が消えることはなかった。確固たる目的、意思が襲いかかる疲れを弾いているのだろうと僕は勝手に推測している。

「年齢や性別、見上げる時間帯も関係ないみたいだ。今日もらってきた資料でも、発狂した人はやっぱりばらけてる。むしろ月が気まぐれに選んでいるって決め付けたほうがいいくらいだ」

もし仮にそうだとしたら、なぜエステイを選んではくれないのか。そんな理不尽な怒りがこみ上げる。

そして――。

そして、その怒りのあとで、僕は最近、とみに持てあましている感情に翻弄されるのだ。

「……ネイトくん？ どうしたんですか？」

「あ、いや。なんでも……」

「最近よく、そんな顔をしますけど。何か悩みでもあるんですか？」
――ある。

今までだって考えなかったわけではない。そのたびに殺し、押し込めてきた思いが、このところ抑えられない。それは日増しに強くなって、僕の胸を締めつける。

僕は、自ら進んで、彼女を殺そうとしている。

エステイの命の貯金はもうない。だからせめて彼女の望むことをさせてあげたいと、心から思う。仮に今ここで彼女との関わりを絶つてしまえば、そのまま走ることができずにエステイが死んでしまつたら、それこそ悲劇だ。それを理解していてなお、思う。

僕は、彼女を殺すために、必死になっている。

資料を集めることも、親しくもない知り合いに話しかけることも、全てエステイを満足させて死なせるためだ。死ぬという結果を変えようとは思わないのだ。

こういうとき、普通は相手に死んでほしくないと思うものではないのだろうか。エステイの身体が治るように努力するとか、彼女の不運を神に嘆くとか——いくらでも出来る気がする。

そんな思いで心を焼いてしまうほどには、僕は彼女のことを大事に思っていない。あまりに時間が短い。もっと以前から知り合っていて、外見も内面もよくわかっていれば、僕は彼女の「発狂したい」という願いを否定できたのではないか。

最近、そんなことをよく考える。

「……僕は冷たい奴なのかもしれない」

無意識のうちに、そんなことを呟いていた。

「どうして？」

「きみの死を否定しないんだ。運命を嘆こうと思わないんだ」

「……すみません。よく、わかりません」

彼女の当然の疑問を受けて、僕の中の歯車が力チリとずれた。

少しだけ、話してみよう。

そう思っただけで始めた告白を、僕はすぐに後悔することになる。

「客観的に見て、エステイは……その、可愛い。淑やかだし、物腰だっけ丁寧だ。そんなきみと毎日顔を合わせて、もう二週間になるけれど僕は、きみがいなくなることに對して不平や不満が出てこない。悲しいとか辛いとか、思うものじゃあ、ないのかな？ いなくならないでくれ、そんな風に泣いて喚こうなんてちっとも思っていないんだ、僕は。これってひどいことじゃないのかな。前からそうなんだ。自分に恋心を持つてくれている人がいても、別にそれを手に入れたいなんて思わない。その人が月のせいで死なないようにと突っぱねて傷つけた後でも、僕は惜しいことをしたなんて思わないんだ。同じことを繰り返す日常をくだらないと思っても——変えよう

とも思わない」

ボトボトと汚水を撒き散らすように、僕は内面を吐き出していた。爪を噛む癖のように、喋る口を止められなかった。

「僕は、たぶん、三十歳がくる前に死ぬ。寿命の中じゃあ、かなり短いほうだ。けど妥当だとも思うんだよ。どこの男と女がひり出したものかもわからない孤児だから。しかもあんな劣悪な環境で育ったんだから、身体のとこがイカれてて当然だと思う。だから、ええと、」

こんなにも飾らず、自分の胸のうちを吐露したことは、もしかしたら初めてだったかもしれない。止まらない。いつの間にか自分の価値観をぶちまけ始めていた。

「僕はいま浮かんでる月が、半分に見えるんだ。あと十四年。折り返しもすぎてる。絶望するほど短くないけど、希望を持つほど長くない。あと五十年あれば幸せを追求したかもしれない。あと二週間だったら、僕もエステイのように何かを求めることができたかもしれない。けど、なんだよ、もう半分、まだ半分、あと半分！ ぜんぶくだらない、友情も恋愛も親愛も、僕にとったら全てが無価値だ。金を稼いでうまいものを食べて清潔なベッドで眠る以外に、僕は、意味を、感じない」

自分がひどく情けないもののように見えた。エステイは何の表情も浮かべず、人形のように綺麗な瞳で僕を見据えてくる。彼女を困らせ、苛立たせてしまったか。

「……はは。……なに言ってるんだろ、もう、すぐ、死んでしまうエステイの前で……僕は……なんてことを」

お互いの間に、沈黙がねつとりと下りてくる。息苦しくなるほどの時間をおいて、

「——わたしも」

ほっそりとした声が、耳に優しく届いた。

「よくわかりません。思いやりや好意というものが。同年代の知り合いはネイトくんが初めてで、あなたは毎日わたしに会いに来てく

れました。犯罪者だというのに通報もせずに世話を焼いてくれて。対等に接してくれて。すごく嬉しかった」

キィ、キィ。彼女が車輪を押して、近づいてくる。とん、と彼女の膝小僧が僕へとぶつかる。冷たく、人の体温をまったく感じなかった。

「普通、ここまでされたら、ナイトくんのことを好きになるんだと思います。あなたが好きよ。その思いから『生きたい!』という気持ち湧き出て、わたしも現状に不満を唱えるんだと思います。でも駄目ですね。わたしは、走るという目的以外に魅力を感じない」
「そりゃそうだよ。僕とエステイじゃ、釣り合っていない。今まで言わなかったけど、きみ、高貴な家柄だろう?」

こんな綺麗な髪と瞳と肌が、貧窮層で育ってきた者である筈がなかった。

「……わたしは、ナイトくんを素敵だと思ってますよ。嘘じゃないです。瞳の色も、ひねくれているようで優しい性格も好ましく思います。だけど……あはは。さっき女の子に告白されたってこぼしてましたよね? そのことを聞いても、わたしは、嫉妬の一つもしませんでした。ということはつまりと、わたしは恋をしていないだから——」

エステイはほほ笑んでくれた。

「あなたは、おかしくありません」

お互いの間に、綺麗で鮮やかな溝ができた。友人とも恋人とも違う、とても綺麗な一直線の溝が。何かとても大切なものを手放してしまった、そんな思いと同時に、どこかでホッとしていた。救われた、のだろうか、僕は?

「ナイトくん。人生にハリを出す方法をお教えしましょう」

ぴつと人差し指が立てられる。

「約束を、することです。約束をすれば、その約束を果たすまでの間、目的をもって生きられます。これ、わたしが入院中に発見した方法です。利きますよ」

僕らの関係がどんどん変容していく。

お互い歩み寄り、そして、さらけ出した。

「じゃあ約束の一つ目。わたしのことを調べてください。そして明日、会いましょう」

言いたいことが、よく、分からなかった。

「ネイトくんのことを、今日はよく教えてもらいました。ですから今度はわたしの番。心の準備をしたいので、明日までに、調べてきてください」

くすくす、とエステイは今までと同じように楽しげに笑う。

「なぜでしょう。言うつもりなんかなかったのに……。幻滅されると思うのに、わたし、伝えたいんです」

彼女は、心のどこかで決意しているように見えた。

僕たちはとつくの昔に、後戻りなどできなくなっていた。

* *

住民票をめくる。めくる。めくる。めくり終わる。

もう一度頭からやり直し。何度も見直したが、結果は変わらなかった。

——エステイ・キャロルなんて人は、この街には存在しなかった。一つのヒントが転がり出たことで、頭の悪い僕でもどんどん解読が進んでいった。

* *

エステイ・キャロルは、偽名だ。

廃駅のある場所は、祝福の広場と呼ばれている。聖夜の祝祭になぞらえて命名された場所。『聖なる』はSt.と綴る。そこから連想されるのは聖夜祭から一部をもらったクリスという名前。そしてキャロルは、他の国の言葉でノエルと読むのだと辞書で分かった。

この街に住む者ならば誰もが知るノエル家。そこではつい最近、家族だけの密葬が執り行われている。娘の名前は、クリスティーナ・デ・ノエル。生前は身体が弱く、常に病院暮らしを続けていた。すでにとつぷりと日は暮れている。僕は自分の担当区域すらも無視して、半分の月が照らす下を、廃駅へと向かって走っていた。昼前から降り始めた雪は止んでいたが、厚い層となって走るスピードを食い殺してくる。鬱陶しくて仕方がない。一面の銀世界を乱暴に汚しながら、僕は走ることをやめなかった。

調べた事実が再び、頭の中でぐるぐる廻る。

祝福の広場にある駅を施工しようとしたのは、ノエル家の主人——つまりエスティの父親だ。妻と娘への愛を示すために、採算を度外視した建造計画だった。しかし母親が亡くなったことにより計画は永久凍結。忘れ去られた廃墟となった。

しかし、だ。これが分かかってなんだというのか。

それを訊かなければならない。いつもの倍以上の時間をかけて、僕はようやく廃駅へとたどり着いた。ガラス戸に手をかけ、

「あ、れ？」

開かない。棒きれでも引っかけられているのか、びくともしない。

「——開けないでください」

陰の入ったエスティの声が、戸を震わせた。普段の彼女よりもずっと声量が高い。そう——力強い。

「分かりました？ わたしのこと」

「……クリスと呼べばいいの？ それとも、エスティがいい？」

「後者のほうが、ネイトくんとの間ではしっくりきます」

「そう。じゃあエスティ。わけを教えてください？ どうして偽名なんか？」

「……意味なんて、なかったんでしょうね。ノエルの名前を出すよりはごまかしが利くと思ったんですけど、そんなの調べられたら終わりだし。そもそもの話、あの日——ネイトくんとは会わないつもりでした。影でこっそり、廃駅に来る人を見れば、それで満足だった」

たんです」

曇ったガラス戸の向こうにエステイの姿は見えない。車椅子から降りて、戸に背をもたせてしゃがんでいるのだろ。僕もそれに習った。

「通報したの、わたしなんです。廃駅に人が住み着いている、そう車掌室から連絡して……」

「自分で潜伏して、自分で通報？ なにがしたいのさ……」

「寂しかったんですよ。人恋しくて仕方がなかった。ここに忍び込んで三日が経ち四日が経ち、とうとう我慢ができなくなって連絡しました。監視者でも誰でもいい。見つかったらもう捕まってもいいんじゃないかとすら思ってたんです。連絡したときはそれほど参りました。あとから後悔しましたけれどね。そこからわたしは賭けをしました。ホームのところで月でも眺めていて、気づかれなかったら、せめて背中を見送って寂しさを紛らわそう。もし見つかったら……わたしの目的の一部を話してみよう、と……」

見つめあってこそいけないけれど、僕らの視線はいま、初めて同じ高さだった。

「目的の、一部って？」

「……」

「きみの目的は、走るため、だろ？」

「それは……あくまで途中なんです」

「なんだって？」

「わたしは」

深呼吸の間を置いて、

「人を殺すために、ここに来ました」

背中越したというのに、鳥肌が立った。それほどまでに彼女の声には怨嗟の色が滲んでいた。

「腕をちぎって、足をもいで、頭を割って、胴体を引き裂いて……そこまでして、殺したい人がいるんです」

沈黙するのは僕の番だった。

「わたしの父の浮気の噂。知っていますか」

「有名、だから」

「父も昔はそんな人じゃなかったんです。それなのに、あの女が……たぶらかしたんです。わたしはどうしようもなかった。病院に縛り付けられて、足も動かなくて。あの女、何度もわたしの病室まで来ました。不憫な娘を心配するイイヒトを気取って父を籠絡しようとしたんでしょう。吐き気がしましたよ。母の大事にしていた服や宝石を来るたび身につけてるんです。拳句の果てにはわたしが母からもらった、形見のネックレスまで……！ それを見せつけて、わたしが返せと飛びかかったら、ずっと身体を引いて、倒れたわたしを鼻で笑って……！ 蛙みたいね、って……！」

かたかた、かたかた。脆い戸が揺れている。彼女の怒りか、僕の震えか。

「風が気持ちいいわよお、なんてあの女は気持ちの悪い声を出して、いつもわたしの病室の窓を開けて帰るんです。はじめはうつかりかと思いましたがそうじゃありません。わたしに発狂してとっとと死ねと言っているんです。這ってまで近寄って窓を閉めると？ わたしに汚い床を這えと？ 許せなかった。ふふっ……わたしの病室から、月は毎晩よく見えました」

エステイが入らないで、と言った意味がようやくわかった。彼女はいまひどい顔をしている。恨みにまみれ、歪んだ顔は見せられるものではないと思ったに違いない。

「耐えきれなくなつたわたしは、軽薄そうな看護婦を選んでお金を渡して、真夜中にこの廃駅まで連れてきてもらいました。あの病室ではなく、母に縁ある場所で発狂してやろうと思ったんです。これはわたしと母のための、復讐ですからね。ついでに病室を去る時、荒らして窓を割って、まるで月を眺めて狂ったかのように見せかけたら……ははは！ ノエル家の娘は密葬！ 車掌室のラジオで聞いたときは笑いましたよ！ あの女がびくついているかも、そう思うだけで笑いが止まらなかった！」

止まらない。彼女の呪詛が止まらない。

「殺してやる殺してやる殺してやる！ 足さえ動けば、あんな奴、あんな奴！ ……そう、思っ、たのに」

こつん。頭を軽くぶつけてきた。

「三日経つても狼男になれなくて、ずーっと恨むわけにもいかなかった。心が疲れるんです、とても。よく十数年前の恨みを持ち続ける人物とかが物語に出てきますが、あんなの嘘っぱちです。無理ですよ。続きません。頻繁に顔を見せはすれど、持ち続けるなんて……そしたらもう。人恋しくて、辛くて、心が死んじやいそうになってあはは。ありえないでしょ。あの看護婦、一回も様子を見に来ないんですよ。わたしこんな足なのに……誰も……優しくなんて……」

「……………僕は、違う」

ようやくそれだけ口にした。

「そうですね。違いました。毎日来てくれました。とても、感謝してます」

「うん」

「……ネイトくん。まだあるんです、伝えたいこと。嘘をついた謝罪と、有益な情報が一つ……」

「？」

「まず嘘のほうから。えっと、昨日の、ネイトくんを好きでも嫌いでもないって言ったの、嘘なんです」

静かな告白に、胸を抉られた。

「ほんとうは、だいすきなんです」

左胸が熱く、切なくなつた。

「ネイトくんが昨日、女の子から告白された、という話を聞くまで、特に意識しませんでした。大切な友人。そう思っていたのに、他の女の子に取られるのかなと思った途端に、ぶわーって。その後わーってなつて、あわわ、となつたときには、わたし、あなたが好きでした」

「でも昨日は……」

「ネイトくんが迷っていたから。変じゃないよって伝えたくて。言葉を探せなかったから、わたしも一緒ですと言えればいいかな……っ
て。ごめんなさい。わたし、あなたに恋をしています」

心臓の鼓動が速まって、とどまることを忘れている。

なんだろう。この温かい気持ちは。

「そうなんだ……まだ、よく実感が持てないけれど」

「そうですか。いつか届くといいな」

「それでもう一つの有益な情報ってのは？」

もうとつくの昔に届いていた。ずっと浸っていたい気持ちに駆られるが、恥ずかしくて仕方がなかった。話を繋げるために何気なく尋ねたその台詞に、

「耐性を失くす方法です」

衝撃的な答えが返ってきた。

「なんだって!？」

「見つけました。とても単純で、残酷で、ひどい答えでした」

涙声が混じり始めたエステイの声は、聞いているだけで身を切られる思いだった。僕は辛いんだ。自分のことを好きだと言ってくれた女の子が涙をこぼしながら喋る様を想像しただけで、身を切られるような痛みが奔る。

「簡単ですよ。……恋をすると、耐性がなくなるんです」

時が止まった。気がした。

「ネイトくんを返したあと、昨夜、月をちらりと見た瞬間——飲みこまれる! そんな恐怖を覚えました。きつと合ってますよ。誰かを好きだと思ったとき、人は、月への耐性を失うんです」

監視者はみんな人でなしが多い。冷たい人が多い。いま思ってみればそんな奴ばかりだ。そして、監視者を選定する試験も残酷極まりないもの。あんなものをくぐりぬけられる人間が、心温かな人間なわけがない。

「だ、から……わたし、今すぐにでも狼男になれます」

「……エステイ」

「ならせてください。そしてあの女を、わたしに殺させてください」
「……はは、それを伝えるの、僕に。ひどい決断、迫るんだね……」
「ある程度の理性を保てるんでしょう。夜だから人気はほとんどないし、屋根の上でも走って向かいます。あの女を八つ裂きにしたら、毒薬を飲んで死にますから。ネイトくん……協力してください」

彼女の無念。願い。それらはすべて共感できるものだった。母親を本当に尊敬し、愛していたのだろう。でなくては、わざわざこんな街外れまで来た理由が分からない。これは彼女の復讐なのだ。エステイは憎き女のことに対して誇張などしていないだろうし、そもそも、まだまだ語っていない悪行が山ほどあるはずだ。

「どうか。お願いします」

「……エステイ。約束は、果たすまでの間、生きるハリになるんだよね」

「え？」

「僕も真似してみようかな。……その女以外、殺さないと、約束できる？」

「——！ は、はい！ もちろんです！」

「うん、わかった。約束、な」

戸から背を離す。もうこの廃駅に用はない。離れよう。

「ネイトくん！」

「な、なに？」

「……最期の最期で、醜いものを見せてしまつて、ごめんなさい」

「いいよ。それも含めて、エステイなんだろう。いや……そんな醜いものを持たせたのはその女だ。きみは綺麗な子だと僕は思ってる」
本心だった。

「あり、がとう……ございます……」

「うん。僕の方こそ、ありがとう。いま初めて、生まれて初めて、何かをやるうって気になつてる。約束、かあ。いいねこれ」

「はい、はい！」

「それじゃ僕は離れるよ。逃げる時間をくれ。たっぷり時間が経つ

たら目的を果たしに行きな」

はい！ さよなら！ という、エステイの人としての最期の言葉を背中で受けながら、僕は街の方角へと歩き出した。ざしざしと雪を踏み続けた。街はずっと向こうにある。ゆっくり歩いても大丈夫だろう。エステイはきつと、たつぷりの時間を残してくれる。

「エステイ…… さよなら」

いつ以来か。僕は泣いていた。子供みたいにボロボロ泣いていた。拭っても拭っても止まらない。ああ、昨日までの僕とは違う。泣けるんだ。まだ失ってもいないのに、所詮は二週間を過ごしただけの他人だと思っていたのに、泣けるんだ。

きつとあの子が好きと言ってくれたから。こんな温かい気持ちがあると教えてくれたから。

「ありがとう…… さようなら…… ありがとう……」

このまま今夜、一人の死体があがる。

それは変わることはない決定事項。

ははっ、と喝いた笑みがこぼれ出た。

* *

—— アアああああアアアアアアあつ！

人のものとは思えない雄たけびが上がる。廃駅の窓がカタカタと震え、横開きのガラス戸が玩具のようにひしゃげ、吹きとんだ。積もった雪の上をトランプのようにすべっていく様を見れば、狼男となった人間の怪力がどれほどのものか、想像するのは容易い。

—— かつてエステイだったものがゆらりと姿を現した。瞳は猛禽類のように炯々と輝き、華奢な体軀はそのままに、両足に力強い力がこもっているのが分かる。

歩く、歩く、だんだんスピードが速くなる。

そのまま最高速度まで上がるはずだった走りは、

僕の姿を捉えた直後に、しばんだ。

「ウ、うう！？」

「――破るよ、あんな約束。きみに人殺しなんてさせるものか」

「が、ぎ、ああああ！」

「約束は当然、破るために存在しない。普通は守るためにあるものだ。そこに僕は新しい解釈を加えようと思う」

コートから回転式の拳銃を取り出し、銀の銃弾の装填を確かめる。

「約束は、生きるために、するんだ。そうは思わない？」

「あああ、ういうあ、あああ！」

熱くたぎる気持ちがあった。

静かな怒りと情熱があった。

彼女への恋心も、明日からの日々を楽しく過ごしてみようとも思
い始めていた。

エステイから僕は、命の生きかたを学んだのだ。そんな恩人の手
を、血で染めさせるわけにはいかない……！

「あの場で撃つのは早いと思った。なぜなら、きみは、走る夢を叶
えてないから。僕の勝手な推測なのかな？ きみはその憎い女がい
なかったら、きっと、純粋な願いで狼男になろうとしたと思うんだ。
短い人生だったけれど、自分の足で走ってみたい、そう思って、き
みはきつとこの駅に来たと思うんだ」

エステイも泣いている。ぼろぼろと涙をこぼし、歯ぎしりをして
耐えている。きつと彼女の中には、抗いがたい僕への破壊欲求があ
る。それを抑え込んでいる。

「きみは優しい子だよ。綺麗で可愛くて、人を殺すなんて本当は考
えたりなんてしない、大人しい子なんだよ。周りの人間は馬鹿ばか
りだ。男も女も見er目がないんだ。僕は信じるどころか確信してい
る。きみは素敵だ。他の奴らに、きみを褒める権利もけなす権利も
渡さない。渡すものか――」

エステイが飛びかかってくる。肩をつかまれ押し倒された。それ
だけでめきやめきやと骨が砕ける音が鼓膜に響く。叫びを噛み殺し、

僕は彼女に微笑んだ。

「エステイ。さつきは返事をしてなかったよね」

「う、あ……あ、あ」

首に腕がかかり、みしみしと締め上げられる。

それでも、言葉を紡ぐ程度の隙間はあった。

「好きだよ、エステイ」

「……………う、え……………い、い」

かすれる視界の向こうで、僕は撃鉄を起こした。

「今日から……………月は、見ないこ、とに、するよ……………」

引きたくない引きたくないと叫びながら、僕は人差し指に力を込めた。

彼女のこめかみにあてた拳銃が火を噴き。

パアツ——と渴いた音がして。

彼女の身体から力が抜けていく。

ゆっくり、ゆっくりと。

銀色の髪をさらさらと揺らしながら、崩れ落ちる彼女は。

たしかに、笑ったように見えた。

* * *

それから僕はしばらく職を取り上げられた。廃駅で違反者を匿っていたこと、職務を怠慢して彼女と会っていたこと、それらは語るまでもなく上司に筒抜けとなったからだ。

大幅な減俸と実績の消失。始末書と大量の罰金。ついでに上司の右拳。殴ったあとに気分の高揚した上司に「これイイな。もう一回殴っていいか？」とウキウキ尋ねられたことはたぶんしばらく忘れない。あの人は最高で最低だ。

幸い、コートを一生脱いだまままでいなくて済んだのは助かった。貯金もほとんどなくなったが、街外れに墓を建てる金くらいは残った。これからしばらく水と古パンだけの生活になるが構いはしな

い。

分かっていったことだが、エステイが一人いなくなっただけで街は変わらない。いつも通りの商店街の喧騒を聞きながら、露店を冷やかしながら僕は歩く。

日が暮れるまでに、墓までいけばいいんだけど。

空を見上げると、まだ夕暮れゆえに月はない。上司に耐性を失くす要因として「恋心を持つこと」ということは報告しておいた。彼が爆笑したのは言うまでもない。俺が死なねえはずだ、と彼は笑った。

僕はもう自信がない。月を見れば、奥歯に仕込んだ毒があつという間に砕けると思う。

だけど僕は屈しない。屈するはずがない。要は見なければいいんだろ。

おい、月。

空にぶかぶか浮いて、人を嘲笑いたければそうしてろ。

お前がずっと空に浮いているなら、こっちにだって考えがある。笑ってやる。楽しんでやる。人生を謳歌してやる。

高らかに、人間賛歌を叫んでやる。

お前なんて見なくなつて、人は人を祝福することができると教えてやる。

散々、空に向かって叫んだあとに、僕は彼女を見つけた。

花売りの少女だ。

「やあ」

「えっ……あ、ど、うも」

すすす、と僕から離れる。その原因を作ってしまったのは僕だ。素直に頭を下げる。

「ごめん。あれは本心じゃなかった。許してくれ。きみはいい香りがするよ」

「へっ？ え、あの？」

「ああ、ごめん。とりあえずそういうこと。……それと買い物、い

いかな。知り合いの墓参りに行くから、綺麗な花が欲しいんだ」

「あ、はい。えっと、これなんかは？」

「いいね。貰うよ」

財布から硬貨を取り出しつつ、僕はたった今閃いたことを提案してみた。

「これから毎日、花を買ってもいいかな」

余計に食事情勢は厳しくなるが、致し方あるまい。

「は、い。それはもう、ぜひ……？」

彼女は不思議そう。そりゃそうか。

「知り合いにいっぱい花を供えてあげたいし、きみにも謝りたい。その機会が欲しいんだ」

「……」

きょとん、とした後に。

「え、へへ」

恥ずかしそうに笑う彼女が、少しだけ、あの子に似て見えた。

僕も同じように、笑えた。

「約束する」

明日が、少しだけ、楽しみになった。

（後書き）

大学のサークル用に仕上げた短編になります。読了してくださった方、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6080s/>

ムーンナイト・キャロル

2011年4月25日04時10分発行